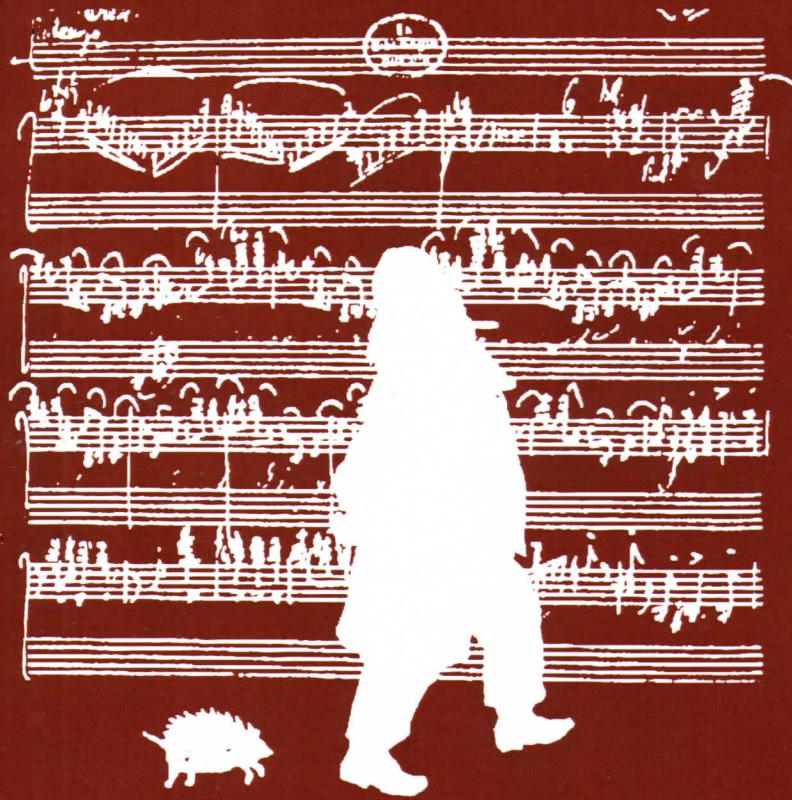


日本ブームス協会 会誌

赤いはりねずみ

ZUM ROTEN IGEL



2021
第49号

赤いはりねずみ 目次 第49号 2021

卷頭言	「B協会ピアノコンサートを聴いて」 ～私の3つの「楽しみ」～	本多中二	5
論文	ブラームスの《交響曲第3番》における作品構成の思想	西原 稔	7
研究	ブルックナーとブラームス —主題とその展開に関する比較研究—	岡本雄大	49
例会報告	Nº155 ブラームス／濃密な五重奏の世界 —クアルテット・インテグラの魅力を中心に—	横田 健	56
インタビュー	磯村和英：東京クワルテットとともに45年		61
新刊案内	「ヨハネス・ブラームス」生涯、作品とその真髄	山田 豊明	82
例会報告	Nº156 ブラームス《ピアノ小品集とピアノ協奏曲第2番》 《ピアノ小品集》を演奏して 《ピアノ協奏曲第2番》を演奏して(1) 《ピアノ協奏曲第2番》を演奏して(2)	本田裕暉 尼子裕貴 三原未紗子 廣瀬加奈	83 88 89 91
連載	ブラームス録音小史 第11回 LPレコード〈モノラル編4 英デッカ(1)〉	山田 豊明	93
海外通信	コロナの世界 オランダから「オミクロンの猛威」	金丸葉子	106
活動記録	2021年度	重成 瞳	109
後援・推薦コンサート	2021年～2022年	羽木光彦	111
英文目次			118
編集後記			119
入会案内			表3
扉絵	ブラームス没後125年… 残された人間性豊かな深い音楽を、私達は愛します！	染川英輔	
口絵写真カラー		羽木光彦	

■日本ブラームス協会 夏例会 No.155

「ブラームス／濃密な五重奏の世界」

2021/7/11 (日) 2pm ヤマハ銀座店 6F サロン

共催 (株)ヤマハリテイリング 銀座店 6F サロン

ブラームス／ピアノ五重奏曲 へ短調 Op.34

ブラームス／弦楽五重奏曲 第2番 ト長調 Op.111

カフルティエ・インテグラ

Vn.三澤響果, 菊野凜太郎 Va.山本一輝 Vc.築地杏里

P.石井楓子, Va.磯村和英 (特別ゲスト)

Japan Brahms Society (JBS) No.155 Summer Concert

"The deep world of Brahms' Quintets "

14:00 Sunday 11 July 2021 Ginza Salon of Yamaha Music Tokyo

Cosponsored JBS and Yamaha Music Retailing YAMAHA GINZA

Brahms / Piano Quintet in F minor

Brahms / String Quintet No.2 in G major

Quartet Integra Vn.Kyoko Misawa Vn.Rintaro Kikuno

Va Itsuki Yamamoto Vc.Anri Tsukiji

Piano Fuko Ishii Va.Kazuhide Isomura(Special guest)



ブラームス ピアノ五重奏曲 へ短調

Brahms Piano Quintet in F minor



(C) JBS

Vn. 三澤響果 P. 石井楓子 Vc. 築地杏里 Va. 山本一輝 Vn. K.Misawa R.Kikuno P.F.Ishii Vc.A.Tsukiji Va.I.Yamamoto



(C) JBS



(C) JBS

弦楽五重奏曲第2番 Va.磯村和英(特別ゲスト) String Quintet No.2 in G major Va.Kazuhide Isomura(Special guest)



(C) JBS

講演「東京クワルテットと45年」 磯村和英、西原稔



Lecture 「45 years with Tokyo Quartet」 K.Isomura M.Nishihara

ブラームスの《交響曲第3番》における作品構成の思想
Thought of work composition in Brahms's "Symphony No.3"

西原 榮
Minoru Nishihara

《交響曲第3番》は、それまでの2曲の交響曲とは創作の背景を異にしている。ハイドンやベートーヴェンなどの古典的な交響曲の伝統を継承するとともに、それまで手掛けた2曲の《セレナード》や《ハイドンの主題による変奏曲》を土台に《交響曲第1番》や《交響曲第2番》を経て作曲されたのがこの《交響曲第3番》である。この作品は比較的早い筆で作曲され、オーケストレーションや動機の展開の技法などの点で習熟した一面を見ると同時に、作品の構成の新たな試みが行われており、その試みはおそらく《交響曲第4番》に受け継がれている。

《交響曲第3番》は全4曲の交響曲の中でもっとも統一性が意図的に図られている作品である。第1楽章の主題が第4楽章の最後に回帰し、主題の循環が用いられているだけではなく、モットー動機の使用やシンメトリックな主題や動機、調の構成は、彼の新たな創作意思を反映している。この作品における主題動機を、マスグレーヴやブロドベクらは最初の伝記作家であるマックス・カルベックの言及を土台に「ライトモティーフ」として解釈している¹。この「ライトモティーフ」はカルベックによるブラームス解釈の核心でもあり、本論文で論及したい。

第1章 《交響曲第3番》の作曲過程と評価

1 《交響曲第3番》の作曲過程

この作品を作曲した1883年は、アルト歌手のシュピースとの親交を深めた時期で、ブラームスはきわめて高揚した精神状態にあったと思われる。1883年10月初旬、ドヴォルザークはブラームスを訪問した折のことをジムロック宛ての手紙の中で、これほど陽気なブラームスをみたことがなかった、と語っている²。この折、ドヴォル

¹ Michael Musgrave. *The Music of Brahms*. Oxford. Clarendon Press, 1985. p.221.f.
David Brodbeck. *Brahms and the New German School*. ed. by Walter Frisch. In *Brahms and His World*. Princeton : Princeton University Press. 1990. p.87.

² Johannes Brahms. *Life and Letters*. Selected and annotated by Styra Avins. Translation by Josef Eisinger and Styra Avins. Oxford, Oxford University Press.

ブルックナーとブラームス
—主題とその展開に関する比較研究—

Bruckner and Brahms

—A comparative study of theme and its development—

岡本 雄大
Yudai Okamoto

はじめに

本研究は、19世紀末のヴィーンで活躍し、しばしば対立的に語られてきた2人の作曲家、ブルックナーとブラームスの交響曲について、それぞれの主題の構成法とそれが楽曲においていかなる役割を持っていたかを分析した上で、比較検討するものである。

1. 作品の分析

1. 1. ブルックナーの主題構成法とその展開

ヴェルナー・F・コルテが「鎖状構造 Kettenstruktur」¹と呼んだブルックナーの主題構成法は、ベートーヴェン以来の交響曲作家のそれと比べて独特な様相を呈している。ここでは《交響曲第8番 c-Moll》の冒頭楽章に沿ってそれを確認する。まずf音のトレモロの上にまず主要主題の核となる楽想（以下、「核楽想」と呼ぶ）が提示される（T.2-5）。この楽想を特徴づけるのは、①「16分音符の鋭いリズム」と②「半音階的要素」である。続いてこの楽想はゼクエンツされ（T.6-9）、そしてその後3度目の登場を見たかと思いきや、その後半部分は4分音符2つと3連音による5音動機に変化している（T.10-13）。これはコルテが「追加 Addition」と「並列 Reihung」という語で呼び分けた²ところの「並列」にあたり、確かにT.2-5（あるいはT.6-9）で見られた楽想とは異なるが、冒頭のリズムを正確に引き継いでおり、その間には認識可能な連関が形成されている。今度はT.10-13がゼクエンツされ（T.14-17）、その後半部の5音動機がたたみかけるように積み重ねられ（T.18-22）、主題の確保へ向かう。

このような一連の過程をコルテは「鎖状構造」と呼んだのであるが、まずもって言及しなければならないのは「主要主題の核となる楽想」を特徴づける2つの要素である。まず①「16分音符の鋭いリズム」であるが、ブルックナーの主題においてはリズムが本質的な役割を担う。そこでは音程関係は副次的な要素となり、既に冒

『 ブラームス / 濃密な五重奏の世界 』 を聴いて
- クァルテット・インテグラ の魅力を中心には
Fresh and attractive gifts from the gifted group "Quartet Integra"

横田 健
Takeshi Yokota

はじめに

ブラームス協会の若手演奏家支援プログラムはとても魅力的だ。彼らの真摯で好奇心に満ちた演奏はいつも素晴らしいし、演奏後のインタビューや打ち上げの席で聞く生の声はとても面白くて楽しいからだ。私はもともと若い人との会話が好きなこともあり、例会をきっかけに多くの若手演奏家たちと SNS 等で繋がり、直接演奏会の案内を貰っては聴きに行っている。その中にはレッスンを受けるまでになった人もいて、本当に楽しく交流しているのである。

さて、今回の主役はクァルテット・インテグラ、ゲストのヴィオリニスト磯村和英さんのお弟子さんたちである。彼らの在学中に結成され、以来 6 年間ずっと磯村さんの指導を受けてきたそうだ。今回の例会は「ブラームス / 濃密な五重奏の世界」と題し、クァルテット・インテグラの 4 人に 1 人加えた 5 人による 2 曲の五重奏曲がテーマとなった。1 曲目はピアノ五重奏曲で新進気鋭のピアニスト石井楓子さんと、2 曲目は弦楽五重奏曲第 2 番で、師匠磯村和英さんと彼らにとっても初めの共演という夢のようなプログラムとなった。

本稿では、今回の主役であるクァルテット・インテグラ(以後インテグラと略す)の魅力を中心に、例会で私の中に巡ったいくつかの“想い”を並べてみたいと思う。

1. インテグラの特徴と魅力

私が思うインテグラの魅力は、何といっても弦楽器の厚い響きから来ていると思う。チェロとヴィオラの中低音が太くて安定感があるため、その上に乗る 2 本のヴァイオリンの音が透き通ってきらびやかに聴こえるのである。このため、全体として美しく多彩な響きが出来て、これでパート間の切れ目を感じさせない息の合ったアンサンブルを組み立てるので、さまざまな想いが詰まったブラームスの音楽が、

磯村和英 東京クワルテットとともに 45年 終演インタビュー
Kazuhide Isomura 45years with Tokyo Quartet

End interview



プログラム

- ・ ブラームス／ピアノ五重奏曲 へ短調 Op.34
- ・ ブラームス／弦楽五重奏曲第2番 ト長調 Op.111

クァルテット・インテグラ 特別共演

Vn.1st 三澤響果

Va. 磯村和英

Vn.2nd 菊野凜太郎

Va. 山本一揮

Vc. 築地杏里

Pf. 石井楓子

ききて 西原 稔

2021年7月11日(日) 於ヤマハ銀座店 6F サロン

「ヨハネス・ Brahms」生涯、作品とその真髓
“Johannes Brahms” Lifetime, The work and its essence

ムック形式によるブラームス本。過去に音楽之友社が発行した「音楽の友」及び「レコード芸術」に掲載されたブラームス関連の文章を3章に分け再構成している。

「演奏家が語るブラームス」「ブラームスの生涯」「ブラームスの演奏法&ディスク」から成る。

採択の対象となっているのは「音楽の友」1983年6月号から最新のものでは「レコード芸術」2019年3月号までの計6号分だ。

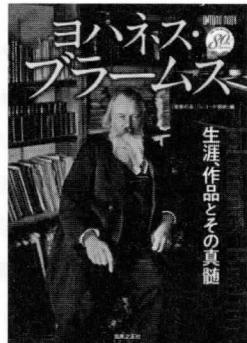
「音楽の友」誌は1983年6月号でブラームス生誕150年を記念し、特集“ブラームスなんでも百科”を企画しており、ムックではこれが一つの核となっている。初出一覧による計28項目のうち7項目がこの時のものだ。初出は1983年だが、もちろん現段階で訂正すべき内容は見当たらない。

単独の著者による紹介本などと比べてムックの便利な点の一つは、例えば「ブラームスの交遊録」や「ブラームスの愛した女性たち」のように各々のカテゴリーについての情報が整理されていることだろう。読んでいても楽しさが膨らむ。

私たちの協会にもブラームスに関する記事が掲載されている雑誌は必ず入手しているという仲間がいる。私なども、ただただその部分を読むためだけに購入してしまった雑誌が狭い部屋の中で幅を利かせている。

これらの雑誌に再び目を通すということはあまりなかった。しかし、こうしてまとまった形であらためて読み返してみると、その折々に得た線のような情報は縦横に交差し、ブラームス像が鮮やかに浮かび上がってくる。そんな意味でブラームス入門に最適だともいえるが、いっぽうでは「21世紀のブラームス交響曲像」や「ブラームスと19世紀後期の交響曲」などのように、コアなファンにとっても興味深いテーマが収録されており、幅広いファン層から受け入れられるような内容になっている。

(編集長 山田豊明)



音楽之友社刊
 「音楽の友」「レコード芸術」編
 定価 1870円(税込)

ブラームス《小品集&ピアノ協奏曲2番》
Brahms Piano Pieces and Piano Concerto No.2

本田 裕暉
Hiroaki Honda

日本ブラームス協会（以下JBS）の第156回例会は、新型コロナウィルス禍がつかの間の落ち着きを見せていた2021年12月5日に、駒場のピアノ・サロン「ムジク・ピアフォース」で開催された。変異種のオミクロン株の感染が拡大し、海外の音楽家の来日や予定通りの公演催行がふたたび困難になってきている現状（執筆時=2022年1月下旬）から観れば、まさにここしかないというタイミングでの開催であり、無事に例会を実施できたことそれ自体が奇跡であるようにも感じられる。一般的な来場者には2回のワクチン接種日と病院名の登録を経たうえで発券し、当日は建物入口で来場者全員の検温・手指の消毒を実施、さらに休憩時間中には会場の出入口のみならず、ステージに向かって左側の窓も開放して換気を行なうなど、様々な対策と配慮、協力があってこそ実現した例会であった。

今回の第156回例会は、当初は10月31日に予定されていたものの、情勢を鑑みて公演中止となつたレクチャー・コンサートと、例年実施されている冬例会を統合した2部構成で行なわれた。第1部は協会顧問の西原稔によるミニ・レクチャー「ブラームスのピアノ作品の様式に関する考察」（約30分）と尼子裕貴によるピアノ小品のリサイタル。そして、20分の休憩を挟み、第2部は三原未紗子と廣瀬加奈による2台ピアノ版《ピアノ協奏曲第2番》という構成であり、例年の冬例会のテーマである「シューマン 全ピアノ作品の研究」は事実上お休みということになつたが、結果的にブラームスのピアノ作品の魅力を様々な角度からじっくりと味わえる、いかにもJBSらしい例会となつたようだ。

第1部でブラームスのピアノ小品を演奏した尼子裕貴は、2020年12月6日の第154回例会に続いて約1年ぶりの登場。尼子は桐朋学園大学にて研鑽を重ねつつ、



ブラームス録音小史 第11回
LPレコード<モノラル編4 英デッカ(1)>
"Short history of Brahms Music Recording" vol.11
LP RECORDS Monaural 4 Decca(1)

山田豊明
Toyoaki Yamada

ブラームスのモノラル録音によるレコードをレーベル別に紹介しているシリーズ、
今回はいよいよヨーロッパに移り英デッカだ。

デッカはイギリスのレコード会社で、レーベル名としてもその名が通っていたが、
20世紀末からの音楽業界再編の結果、現在は多国籍音楽企業であるユニバーサルミ
ュージックグループの一部門へと縮小されてしまった。

したがってレーベル名として“デッカ”は今日も認知されてはいるが、かつてウ
ィーン・フィルをはじめとして、アンセルメ、ショルティ、メータ、デュトワ、バ
ックハウス、アシュケナージ、パヴァロッティ（専属ではないがカラヤンもベーム
も）などの豪華演奏家陣によるデッカの黄金時代を知る者からするとその存在感の
低下には隔世の感を抱く。レコード・ファンの1人として、その寂しさもひとしお
だ。もっとも、さらにそのデッカに統合されてロゴ表示もなくなり名称すら消えて
しまったフィリップスのような例からみればまだ良いほうなのかもしれない。

これから紹介するのは全盛時代の、まだ前半とも言える頃の英デッカ・レコード
の成果だ。

1. 英デッカと米ロンドン

はじめに、デッカ・レコードの設立とその後の動向、各社のLPレコードの発売
開始時期を簡単な年表にしてみた。

- 1929年 イギリスでデッカ・レコード（英デッカ）を設立
- 1934年 英デッカがアメリカに進出、英デッカの子会社として米デッカを設立
- 1938年 米デッカが英デッカから独立
- 1947年 英デッカがアメリカでロンドン・レーベルを創設。英デッカのアメリ
カにおける販売窓口とする
- 1948年 米コロムビアがLPを開発・発売
- 1949年 米ロンドンが（英デッカの）LPを発売(8月)

海外通信

Oversea Report

コロナの世界 オランダから「オミクロンの猛威」 The World report from Netherlands "Omicron Wave"

金丸葉子
Yoko Kanamaru

寅年を迎えた2022年、オランダではオミクロン株がコロナ陽性者の95%になりました。

周りのオランダ人は「久しぶり、元気にしていましたか？」の代わりに「どうしています？ 最近コロナに罹りましたか？」という挨拶をしています。

私は毎朝、簡易コロナテストをして、息子と私のお弁当を作り、リハーサルに出かけるのが日課になりました。

コンセルトヘボウ大ホールの地下にあるカフェテリアは、ロックダウン以降閉まっています。唯一楽しみなのが、ホール入口近くで入れてくれる温かいカプチーノです。

感染対策のため、今は、紙コップになりましたが、それでも、リハーサルの休憩時間に合わせて、コンセルトヘボウのスタッフがサービスしてくれることが嬉しいです。

現在は子供の感染を中心にオミクロン株が拡がっております。

近くの小学校では、6つのクラスが学級閉鎖（感染者93人）になったことを聞きました。息子の通うモンテッソーリ小学校は完全な公立校ではなく、割と小さな規模なので、まだそこまでには至っておりません。子供のマスク義務は13歳からで、小学校ではやっと9歳以上がマスク推奨になりました。

息子のクラスは（6歳～8歳）先生も生徒もマスクなしの学校生活で、いつか、



積み上げられたコロナテストキット。今はどこでも売り切れ状態ですが、オーケストラから毎週配られます。一週間に4～5回、リハーサルやコンサートのある当日朝に検査をします。